

# 世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

AGCO marks 20-year milestone  
オーストラリア

## AGCO社、20年の節目を祝う



多国籍企業AGCO社の20周年を祝う会場。同社のオーストラリア支部長フォーウィック・マコーミック氏と情報交換する、B&B農機社のマシュー・クロンク氏（左）



過去20年間に23以上の企業との合併買収を繰り返して、今では多国籍企業となったAGCO社が、世界各地の営業拠点で20年の節目を祝った。

オーストラリアとニュージーランド向けのショールームとなっているプリズベン・コンベンション・エクスヒビション・センターでも、同社の顧客である農業経営者やコントラクターなど約300人が一堂に集まって、この祝賀会を楽しんだ。

今日、AGCO社の傘下にはマッセイ・ファーガソン社、チャンドラー社、フェント社、ヘストン社、ヴァルトラ社など、有名ブランド企業の名前がずらりと並ぶ。顧客はAGCO社のショールームに行けば、必ず欲しかった機械が見つかる。そんな状態を目指して、マルチブランド化を進めた結果だ。90年代の初めには2億ドルだった売上高は、昨年度には80億ドルに到達した。

ヨーロッパでの景気減速が心配されているが、AGCO社の世界戦略ではヨーロッパの収入減も、オーストラリアでの業績伸長で相殺する見込みだ。

Convenient grain storage  
米国

## 収穫後の作業を簡単に！



ミネソタ州のロフトネス社が開発したグレイン・バッグ・システム。長大なバッグと、充填機と、取り出し装置の3つで構成される。バッグに穀物を詰め込むのが充填機、取り出し装置はそれを逆に吸い出す。



収穫した穀物を農地から貯蔵施設に運ぶのをやめれば、時間とコストを大幅に削減できる。そのためには収穫したコンバインから運搬用の袋に穀物を詰め込んでしまえばよい。忙しい収穫期に、農地と貯蔵施設を往復する煩わしい作業をまったくしない方法があるのだ。

それが米国ミネソタ州に本社を置くロフトネス社が提供しているグレイン・バッグ・システム（GBS）だ。水はけが良くて尖った物がない所なら、収穫作業をしている現場が、作物の最適な保管場所に早変わりする。

グレイン・バッグの材質はポリエチレンで、用途に合ったサイズを選べる。最も人気があるのは3m×75mの製品で容量は250〜300t。同システムはバッグと、充填機と、取り出し装置の3つで構成されている。

充填機の特徴は2・4m×2・4mの巨大なホッパーだ。コンバインから収穫した穀物を、迅速にバッグに充填できる。バッグは伸縮性の高いバンジー・コードと丈夫なロープで充填機に固定されている。早く繰り出し過ぎてバッグ内に隙間ができることはない。穀物が逆流したり、地面にこぼれ落ちたりすることもない。

取り出し装置はバッグに詰め込まれた穀物を毎分3・5〜3・75t、1時間に約200tの速さで輸送用トラックに積み替えることができる。



**More energy from sugar cane**  
南アフリカ

**もっと多くのエネルギーを！**



クワズル・ナタール州のエーストン地区で開催されたワーキング・ワールド・デイ（農業機械展示会）の会場で、南アフリカサトウキビ研究所のピーター・リオン教授はサトウキビから抽出されるシロ糖成分は、サトウキビ全体が含有するエネルギーの3分の1でしかないとする研究結果を発表した。

これによると、サトウキビの葉や茎を搾ったかすである「バガス」に含まれるエネルギーのうち、利用されているのはほんの僅かだということだ。

国際的に環境意識が高まり、化石燃料のコストが上昇したことで、発電と給湯用にサトウキビの残さを利用する例が増えている。南アフリカでもスワジランドのウボンボにある製糖工場が燃料用のバガスを補足するために、サトウキビの残さを利用する技術の開発を5年以上も続けている。長年、バガスは製糖工程で使われるボイラーの燃料になっていたが、現在では残さも加えることで火力発電用の燃料として利用できる。

工場が稼働を続けるには、残さの輸送コストを下げなくてはならない。これは農業機械の産業界が挑戦しなければならない新たな課題であろう。



ウボンボの製糖工場ではサトウキビ残さを集めるためにポッティンガー社製ジャンボ6600型（右）とクラス社製ラウンド・ベラー（上）を使用している。



**Weigh the wagon**  
オランダ

**新しい重量計測システム**



重量を計測すること自体は新しい話題ではないだろうが、オランダのシュイトメーカー社のサイレージワゴンに搭載した計量システムは目を引く新商品だ。同社がこれを開発した理由は、オランダ国内の酪農経営者が多機能型ラビデ・ワゴンを自動積み込み用、一般的なサイレージの輸送用、そして給餌用と3種類の作業に使用していて、特に給餌作業で計量機能が付いていることを必要とする声が多かったからだ。

その要望に応じて同社は、サイレージワゴンの油圧ユニットに掛かる圧力を計測するセンサーを開発した。既に同社製のサスペンション・システムが使われていれば搭載費用は少なくて済む。

これにより正確な給餌量が計測できるようになった。それだけでなく、請負業者が牧草の収穫期に自動積み込みワゴンとして使用する時に、

この計測装置を利用していう。

例えば収穫した牧草を売る買する場合、この計測機能を使えば、収穫作業をした請負業者は牧草の総重量を簡単に計算できるといわれる。



新型の重量計測システムはシュイトメーカー社製ラビデ・ワゴンの人気オプションになると期待されている。